

坪井正五郎によるアイヌ民族資料の収集

文
齋藤玲子

PROJECT

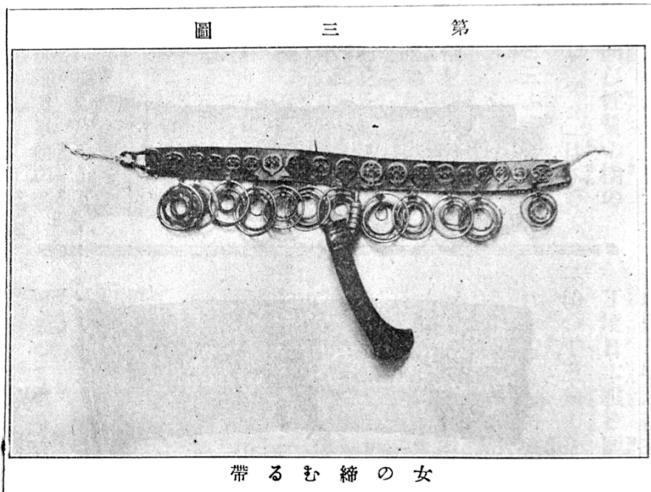
共同研究 ● 明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動
— 国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の再検討 (2012-2015)

本共同研究は4年目となり、まとめの年に入った。国立民族学博物館（以下、民博）が所蔵する資料のなかでも、北海道、樺太、千島において第二次世界大戦終結までに収集された先住民の資料を中心に、収集地や年代、使用していた民族などの情報を見直し、修正・追加することを目的としている。それとともに、資料の収集にあたった研究者の視点や被調査者・資料提供者との関わりをとおして、当時の人類学・民族学の研究や先住民をとりまく社会の状況についても明らかにするために、収集者の足跡をたどる研究を続けている。本共同研究で対象とする資料のなかで、数量的には、東京大学理学部人類学教室旧蔵資料（以降、東大旧蔵資料）と、日本民族学協会附属民族学博物館旧蔵資料が大きな割合を占めており、これらには十分ではないながら資料カードや台帳なども残されていることから、それを手掛かりに調査を進めてきた。2014年度は、東大理学部人類学教室の初代教授だった坪井正五郎（1863-1913）による資料収集と、東大旧蔵資料について新たな知見が得られたので、それらを中心に報告したい。

坪井の樺太調査

2014年度の最も大きな成果は、2013年度に予備的な調査をしていた東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター所蔵「坪井家関係資料」のうち、坪井正五郎のノートや日記、論文の切り抜き等の調査・検討を進めたことである。坪井家関係資料は正五郎の遺したものが中心であるが、祖父・信道や父・信良から長男・誠太郎にいたる4代の資料が含まれている。総点数5000点あまりと多数であるため、『坪井家関連資料目録』（同社会情報研究資料センター編、2012年）の記載事項から見当をつけて閲覧し、調査した。

民博所蔵のアイヌ民族資料に関係するところでは、日露戦争の2年後の1907年の夏に、坪井正五郎が石田収蔵、野中



『みつこしタイムス』（7巻3号、1909年、神戸大学附属図書館所蔵）に掲載された樺太アイヌの女性用帯の写真。



民博所蔵の樺太アイヌの女性用かぶりもの。

完一らとおこなった樺太（サハリン島南部）調査行の記録類がある。この樺太調査は坪井が希望したもので、日本の石器時代人の由来の研究、つまり、いわゆるコロボックル論争の延長にあたるものだった。しかし、遺跡調査等もおこなったものの、コロボックルに関する報告はほとんどなく、1907年から1911年にかけて『東京人類学会雑誌』に発表された、「樺太アイヌの姓名」（同誌258号、1907年）をはじめ、4編の短い報告にとどまっている。一方、石田はその行程を「樺太紀行」上・中・下（同誌265-267号、1908年）として寄せている。板橋区立郷土資料館には彼の野帳も所蔵されているため、この調査については石田の記録が詳しいものと考えられてきた。

しかし、2014年度の調査では、坪井の残した記録や『東京人類学会雑誌』以外に掲載された講演録や短信の切り抜きが確認され、石田と同等もしくはそれ以上に詳しいものであることがわかった。1次資料としては、野帳2冊と小さめのスケッチブック2冊があり、日程順に記録されている。また、坪井と妻子らが1つの帳面に日々の様子を記した『家庭共同日記』もあり、坪井の調査行の発着日はもちろん、東京の自宅に届いた樺太からの絵葉書のことなども書かれている。しかし、これらの内容の精査にはまだ時間を要し、公表する段階には至っていない。

樺太アイヌ女性のかぶりものと帯

坪井は『東京人類学会雑誌』への寄稿のみならず、人類学の普及・紹介にも熱心で、隣接する分野の学会をはじめ、一般向けの講演会なども多くおこなっていた。また、子ども向け、女性向けの雑誌などにも多様な記事を寄せていた。

たとえば『地学雑誌』（20巻1-3号、1908年）には、樺太から帰って間もない1907年10月22日に講演した「樺太アイヌの工藝技術」が3回にわたり収録されている。これは学会誌に収録されたもので、坪井の著作集の目録にも挙げられているが、次の2編はあまり知られていない出版物であろう。

1つは、三越呉服店の「流行会」の席上で1909年2月23

日に講演した「樺太の美術」で、同年の『みつこしタイムス』（7巻3号、5-27頁）に収録されている。そこには、民博の標本となっている資料の詳細な記述が多く含まれており、たとえば標本番号 K2425 の帯については以下のとおりである。

此帯の方は『アイヌ』の美術として御話すべきことでありませぬが此下に附けてある小刀の鞘は『アイヌ』の細工でありまして此入組んだ全體の模様などに餘程面白い所があります。無論是は中身が鞘に附いてあったのですが中身は『アイヌ』が尊重して居るもので、こちらには用の無い品物でありますから、それは残して鞘ばかり持って來ました。（原文のルビ省略）

同誌には写真も掲載されており、民博所蔵資料の現状は、飾り金具に若干の破損があるものの1909年当時とほぼ同じ状態であることが分かった。鞘だけである理由も明らかになった。また、本館に展示中の標本番号 K2459 のかぶりものには、以下のような経緯があった。

此処にあるのははは婦人の髪の毛の亂れないやうに冠ところの鉢巻の類で…中略…此處に浪のやうに糸で刺繍がしてあります。…中略…

其時に『アイヌ』の欲しがりさうなものを遣つて是と取替えたのであります。此處に附けてあるのは木彫の小さな鳥であります。之をもぎつて持つて行かうとしたのを、此鳥は私が欲しいのだから是非附けて置いて呉れと言ひましたら非常に惜んで居りましたが、更に他の物を遣つて此鳥を附けて譲つて貰つたのです。（原文のルビ省略）

これと同じ物ではないかもしれないが、坪井がアイヌの女性からかぶりものを収集する場面を描いた手紙が、『裁縫雑誌』（私立東京裁縫女学校出版部、6巻9号、1907年）に掲載されている。そこに描かれた絵には「此赤いきれをあげるからそのかぶりものをくれないかと談判するところ」との説明がある。坪井の絵葉書やスケッチブックと見比べると、本人が手紙に添えた自筆の絵（あるいは印刷のための写し）と考えてよいだろう。同様の記述は前述の『地学雑誌』にも見られ、彼にとって印象深い出来事だったと推察される。

本稿では今回見つけた坪井の著作の一部を紹介しただけである。それらには、現在では差別的な表現や倫理的に非難されるような行動も記載されているが、それらを含めて、当時の調査・収集方法や研究者の態度について分析してゆくつもりである。

1884年以前のコレクション

2014年度のもう1つの大きな成果は、民博に移管された東

大旧蔵資料のなかに、明治時代前半に収集された古いアイヌの民具があることが確認された点である。

共同研究員の加藤克（北海道大学フィールド科学センター）が、1884年に東京大学理学部から刊行された同大の博物館の目録 *Catalogue of archaeological specimens with some of recent origin* (Department of Science, University of Tokyo, 1984) にアイヌの資料が掲載されていることを、その当時のコレクションについて書いた小山富士夫の「東京帝國大學人類学教室にあるモールス・コレクション」(『陶磁』11巻3号、18-23頁、1939年)から見つけた。これは、東京大学の博物館のうち第五区「古器物」の目録である。同博物館は1877年にエドワード・S・モースによって設置が提唱され、1881年ころには8

区に分かれており、第5区に「古器物」「即ち人類学、考古学、土俗学等」(同上、18-23頁、1939年)の資料が列品されていた。1886年に博物館が廃止されると、これらの資料は人類学教室に移管され、ながく物置に放置されていたのを、長谷部言人が1938年に赴任してから「再発掘」したのである。

小山の報告には、陶磁器の例であるが「番号が朱で附して」あり、「この番号と目録の番号は正しく符合し、朱記のこの番号は博物館に陳列された当時のものであることがわかる」と書かれていた。目

録掲載のアイヌの民具は、資料番号・資料名・数量・地域が挙げられ、一部に日本語・アイヌ語の資料名とカッコ付きで（蝦夷人用）という記載が付されていた。現在、民博に所蔵されている資料について、朱記された番号を目印に探したところ、30件あまりの番号と名称とが一致した。収蔵庫に保管中の資料を中心とした調査結果であり、展示中で未確認の資料があるため、数をもっと増えるはずである。モースやジョン・ミルンらの時代に集められたコレクションで、民博が所蔵する資料のなかで最も古いものの1つであることが確認されたのである。

これらのことは、1997年の東京大学創立百二十周年記念東京大学展『学問のアルケオロジー』で紹介されており、知られてははずのことだったが、民博の資料について調査されたことはなかったようである。

こうしたコレクション自体の由来に関する情報を集めつつ、研究成果をまとめてゆきたいと考えている。

さいとう れいこ

国立民族学博物館民族文化研究部助教。専門は世界の北方地域先住民の文化人類学。アイヌ民族をはじめアラスカやカナダの先住民の物質文化等について比較研究をおこなっている。著作に『鳥居龍蔵の見た北方の民族の交流と境界』（ヨーゼフ・クライナー編『日本とは何か』東京堂出版2014年）、『極北と森林の記憶 アイヌイットと北西海岸インディアンの版画』（大村敬一・岸上伸啓との共編 昭和三十二年）など。



『裁縫雑誌』（6巻9号、1907年）に掲載された坪井の絵。